

会員の広場



私のマンション版“住宅双六”実践記

荒川 太（東京）

最近、郊外の戸建て住宅から駅近のマンションに引っ越す人が増えているようだ。

住宅双六でアガリのはずの戸建て住宅は、子供夫婦の同居なしには“終の棲家”とはならなかつたのかもしれない。私はマンション版住宅双六を実践、ライフサイクルの変化に

にコマを進めた。その後、半年で転勤。赴任先の仙台では賃貸に出したマンションの家賃収入もあり旅行、キャンプなどレジャー三昧であつた。

3年の地方勤務から東京に戻り、その1年後に最初に住んでいたマンション内で広い住宅が売りに出されたので、即決で購入、マンション双六のアガリとした。この時は、小学校に入学する次女の机を置くスペースが欲しかつた。三女も控えていたことから、何の迷いもなかつた。あれから16年、当時4～9歳だった三人娘の居住スペースは拡がる一方、私が寛げる空間はない。飲み屋に憩いを求めてツケが回ってきたのだろうか。

双六のアガリが家族団欒の空間確保だとす

応じて双六を進めてきた。私のマンション双六を振り返り、終の棲家を考えてみた。

私がはじめてマイホームを取得したのは、

23年前、平成3年春である。ラッキーにも住宅公団の人気を博していた団地の最終分譲募集で高倍率抽選の中、射止めることができた。

当時、毎日のように大蔵省に出入りしていた私は、大蔵省主計局に置いてあった住宅公団の申込書を貰い受け、首都圏全域の分譲住宅募集にせつせと申し込んでいた。

安月給だったお蔭で、低所得者優遇枠で当選できた。1LDKだが、僅かな貯金ではこれしか買えなかつた。2人目の子供が生まれ、妻の母との同居も考えるようになり、2年後には同じ光が丘の別の棟の少し広い中古住宅

ると、6人家族の我が家にはいつたい何坪の住宅が必要なのだろうか。国土交通省の定める住生活基本計画における誘導居住面積水準では135坪らしい。幼児だった娘達が成長した分、かい離が生じ、私の専用空間が縮小したのだろう。

終の棲家探しの観点から、私は42坪のコンパクトマンションを購入することにした。まだ建設中で完成は3年後の予定。このマンションに娘を入れさせ、家賃をいただこうとの目論見である。願わくは現政権の政策である女性活躍推進が成功し、娘の給料がアップし、私の懐に入る家賃もアップすることを期待したい。そしていざれ訪れる娘世帯とのマンションのチエンジが待ち遠しい。